
WORLD OUT

水月樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

WORLD OUT

【コード】

N2017N

【作者名】

水月樹

【あらすじ】

「全てが壊れ、終わってしまったその日 俺は生きるために友を殺した」

人々が過ごしていた 当たり前前の日常が、何の前触れもなく”終わってしまった”

大学生、葛和クスワ一弥カスヤはこの変わり果ててしまった世界で生き残るために襲い来る”奴ら”から逃れ、そして戦う。

あらゆるモノが壊れ失われていく中
生き残りを賭けた非日常が始まる

5話「終わりの始まり」を少し修正しました

初めての作品なので話がぐだぐだになってしまいか

もしれません。

そこはご了承ください。

学園黙示録やとある魔術の禁書目録などの設定を少し変えています。
また、オリ主なので上条たちもあまりでません。孝や麗たちは出る
予定は今のところありません。期待していた人はすみません。

読んでくれた方で感想や気になった所などがあれば書いていただけ
れると助かります。

〈序章〉

肌を突き刺すような寒さを誇る12月後半。

人々はクリスマスや正月などといった行事イベントを前に学生は「誰と過ごすか」「何をするか」という話が絶えず、仕事に忙しい大人でさえわずかに浮き足立たせている。

かく言う俺、葛和カズワ一弥カズヤもまたその例に漏れず友達と当日のプランをあーでもない、こーでもないと話し合っていた。

そう人々は皆当たり前のようによって来る、ちょっとした非日常を楽しみにしている。

そんな日常の中で過ごしていた。

そしてそれはこれからも
ちよっとした非日常を迎えながら過ごしていくのだと誰もが思っていた。

そう

あの日を迎えるまでわ。

終わる日常（セカイ）

「キヤーーーーー」

「助けて、助けてくれー」

「やめる離せやめるやめっ」

「痛い痛い痛い痛いイタイイタイイタイイタイイタイイタイ！！」

「おねがい！！ 噛まないでー！」

「アーーーーーアーーーーー……」

「…オッアーーーー」

悲鳴が鳴り響く。

人々が恐怖と不安と苦痛から発する絶望の音。

だがそれだけではない。

それとは別に音程の低く間延びした音。

だが決して聞き逃せない音が響いている。

その音は信じがたいことに人から発せられている音だった。

いや 違う、正確には襲われ 悲鳴を上げ そして息絶えたはずの
人々から発せられている音だった。

ここは大学。俺が通っている登^{トカミ}上^ミ大学の中だ。部活やサークルが他

校より盛んな、それ以外はどこにでもある普通の私立校だ。不真面目な生徒はいても、暴力事件などは一切無かったこの大学で今人が襲われている。

人によって。

終焉（ハジマリ）

下から悲鳴を響かせる校舎の中を一組の少年達が走っている。

体格、服装、髪型まで見事なまでにバラバラな3人組の少年少女たちである。だが、その3人の心は皆ある1つの感情に塗り潰されていた。

その感情とは恐怖であった。襲われるという恐怖。不可解な状況への恐怖。そして、死への恐怖であった。

だが、だからこそ彼らはここまで生き残られたのかもしれない。通常なら人は何かに恐怖したときは過度の緊張により身体がこわばり、身動きすら出来なくなってしまう。

だが、今回のそれは尋常を逸している。今まで感じたことない緊張と恐怖だったからこそ身体が突き動かされたのである。

「何なのよ！ いったい何がどうなってるのよー!!」

廊下を走る中、3人内の1人が叫び出した。

金髪が少し混ざった茶髪のロングに整った顔立ちの少し日本人離れた容姿をしている少女であった。おそらく外国人とのハーフかク

オーターであろう。

彼女は廊下を走りながらなお叫び続けた。

「ねえ！ どうなってるのよ！！ いったい何が起きているのよ！
こんなのあるえない。体を喰われているのに、死んだはずなのに、
何で動き回っているのよ！ 何で人に襲い掛かっているのよ！！」

彼女は他の2人に問い掛けた。今まさに足下で起こっている、あり
得ない状況について。

「……………」

「……………」

だが誰も答えない。
答えられない。

当たり前である。死んだはずの人が人に襲い掛かる。そんなものに
理由を付けられる者がいれば、それは何らかの宗教の信者か、精神
が異常な者ぐらいである。

2人が黙り続けているため、叫んでいた彼女の声も次第に小さくな
り、最後には黙り込んでしまった。

しばらく3人が走っていると、廊下の突き当たりが見えてきた。すると先頭を走っていた長身の少年が他の2人に声をかけた。

「よし、もうすぐ階段だ。そこからいつきに屋上まで行ってそこで身を隠そう。そうすればきっと助かる。みんな頑張ろう！」

少年の言葉はその場にいる全員を勇気づけていた。

確かに屋上の扉は頑丈なため下にいる”奴ら”が追ってきてても鍵をかければ安全であるし、さらに屋上には非常用のハシゴも付いているためタイミングをはかって脱出することもできる。

助かる。例え外に危険が残っていたとしても、彼らにとってはそれだけで希望を持つことができた。

（そうだ、大丈夫。大丈夫だ。）

少年は心の中でそう呟き挫けそうになる己を奮い立たせた。

3人が廊下の突き当たりがもうすぐという所に来たとき、階段の方から一つの人影が突然現れた。

「……っ!!」「」

3人は戦慄しその場に立ち止まりその人影を凝視した。

それはボサボサ頭の青年だった。

ケガをしているのか右手で左腕を押さえ、額からも血が流れていた。しかし、乱れた呼吸やフラフラながらもしっかりとした足取りは明らかに襲い掛かってくる”奴ら”とは違っていた。それはつまり彼はまだ生きているのである。

「佐藤!」

「佐藤君!」

その人影の顔を見て長身の少年とハーフの少女が嬉しそうに叫んだ。そしてその声を聴いた青年も一瞬目を見開いたが、すぐに安堵の笑みを浮かべて話しかけてきた。

「ハアツハアツ、葛和^{クスワ}、ハアツ美鈴、無事だったか」

現れたのが知り合いとわかり葛和と呼ばれた少年も安心し構えを解いた。

「佐藤こそ大丈夫なのか?」

葛和はフラフラになっている青年に駆け寄り寄ろうとする。

グッ

「ん？」

だが、後ろから腕を掴まれ止められてしまった。

振り返ってみるとそれは後ろを走っていた丸メガネをかけた少年だった。

「安易に近づいては行けません。もし下の”奴ら”に噛まれていたら襲い掛かってくるかもしれせんよ」

そこで葛和は少年がなぜ止めたのかわかった。

たとえ今は生きていたとしても、一度でも噛まれていたらそれが軽傷であったとしても絶対に死んでしまう。

そして死んだ後に起き上がり生きている者を追いかけて襲い掛かる。

たった今、下で体験したことが今ここでも起こってしまうのではないかと、そう考えたのである。

葛和は振り返り、すまないと思いつつも、荒れた呼吸をととのえている佐藤の身体を注意深く観察した。

（見た感じじゃ噛み後や大きな傷は無いようだけど……それだけじゃまだ安全かは、わからないな。）

そして葛和は不安と疑っていることに対する申し訳なさを感じながら、佐藤に問い掛けた。

「なあ佐藤。その傷はどうしたんだ？」

葛和の問い掛けに対し、佐藤はすぐに意味を理解したのか微笑みながら答えた。

「ああ、この傷は騒動が起きた時に逃げる人に突き飛ばされて出来たんだ。だから、そんなに警戒しなくても大丈夫だ」

「それは本当ですか？」

葛和が佐藤の言葉に安堵するなか、メガネの少年が再度問い掛けた。

「その傷は本当に”奴ら”に付けられたらものではないのですね。それが切り傷程度であっても、あなる可能性はあるのですよ」

「ちよつとあんた佐藤君が嘘ついてるとでも言うわけ!？」

すると佐藤のそばで簡単な手当てをしていた美鈴がメガネの少年に怒鳴りつけた。

「佐藤君が大丈夫だって言っているんだから大丈夫に決まっているじゃない! あんた何様のつもりよ!」

「何ですかあなたこそ。僕はただ本当に危険が無いか確かめただけ

じゃないですか」

「それが気に入くないのよ！ それってつまり佐藤君のこと信用してないってことじゃない。ホンット サイター」

「何ですかその言い方は！ あなたは彼のことを知っているようですが、僕は初対面なんですよ！」

お互い頭に血が上がってきたのか、言い争いはヒートアップしていく。

そこを葛和が仲介に入ろうとする。

「まあまあ、2人とも落ち着いて。冷静になれって」

「あたしは冷静よ！」

「僕は冷静です！」

しかし2人はまったく耳を貸さず、お互いを睨みつけてしまう。

葛和がほとほと困り果てていると佐藤が2人に話しかけた。

「美鈴 俺は気にしてないから、大丈夫だよ。俺が彼の立場でもそう言っていたかもしれないし。だから、な？ 君も済まなかったね。えっと、名前は？」

「丸田です」

「丸田君も美鈴のこと許してやってくれないかな。悪気があった訳じゃないんだ」

佐藤の穏やかな話し方に2人の頭も段々落ち着いてきていく。

「あ、えっと……、取り乱したりしちやっでごめんなさい」

「いや、僕の方こそ済まなかった」

その様子を見ていた葛和はそこである違和感に気付いた。

(あれ…何か妙に静かじゃないか?)

そう先ほどまで校舎の中を響き渡っていた悲鳴がやんでいるのだ。だがその静けさは安心感を抱かせるモノでは無く、嵐の前の静けさと言つか、何か獲物を狙って息を潜めている。そんな妙な危機感を抱かせる静けさだった。

佐藤達もそれに気付いたのか話すのを止めてそばに寄ってきた。

「ねえ、何でこんなに静かなの?」

美鈴が少し顔色を青くしながら質問をした。
彼女も周囲の変化に不安を感じたのかもしれない。

いや、それよりも何故静かになったのかを考えてしまったのかもしれない。

そしてこう考えたのかもしれない。

もう下の階にいた人達は全員”奴ら”に喰われてしまったのかもしれない。

前日、最後の平穏な日常

戸部町。

四方を山に囲まれた小規模の街で、大きめのスーパーやショッピングモールなどがある。

都心から離れてはいるが最新の家電や流行に遅れることはない。

また若い年齢層の人口も多いため学校も5つほどある。

そして俺が通っている登^{トカミ}上^ミ大学もこの街の北側にある。

山の麓に建っているため農業の学科が多く、またサークルや部活動が盛んでそれ目当てで入学してくる奴も多い。

かく言う俺もその1人……と言っわけでは無く、ただ友達に誘われたのと親元を離れたかったのが理由だ。

一様 剣道部には入っているがあまり上達しなかったため、あまり部活には顔を出していない。

勉強も漢字が少し得意だけなため、成績も下の上といったところである。

だから大抵は放課後に友達とカラオケなど遊びに行っている。

そして俺はあの日も佐藤達とゲーセンに行った。

その日は最新のゲーム機が入ったというので、早速佐藤と対戦した。結果は惜しくも負けてしまった。

まあ 佐藤は頭もいいし覚えもいいから仕方ないとも言える。

その後はシヨツピングモールをぶらつき、ときおり本屋などに立ちより時間を潰した。

日が傾き足下の影が長くなった頃 解散になった。

それぞれが実家や寮に帰るなか、一人暮らしの俺は急いで帰る必要が無いためスーパーなどに寄り道しながら帰ることにした。

そして行き着けの牛井屋で簡単な晩飯を済ませた後、マンションにある自分の部屋に帰宅した。

その後は特にすることが無いのと、もう夜中の12時になるうとしていたのでそのままベットに直行した。

そして日付が変わろうとする頃には深い眠りについていた。

それまでの退屈だが平穏だった日常が、この日を最後に終わってしまつとは夢にも思わずに。

そしてその日の朝がやってきた。

終わりの始まり

日常セカイが終わってしまった日の朝は、いつもと同じように穏やかに始まった。

ジュジュ、ジュジュ。

朝日が差し込む部屋に、けたたましい電子音が鳴り響いた。

その日 葛和が目を覚まして最初に目に入ったのは天井ではなく床だった。
どつやら目覚ましを止めようとしてベットから落ちてしまったらしい。

ジュジュ、ジュジュ、ジュジュ。

まだ眠気が抜けきらないまま、いまだ鳴り続けている目覚ましを止めた。

聞こえてくるのは外から漏れてくる鳥の鳴き声だけになった。

普通なら車などの騒音が聞こえてきても不思議ではない時間だが、このマンションは大通りからは離れた場所に建っているため通勤ラッシュの車の音も聞こえてこないのだ。

カーテンの隙間から漏れてくる光に照らされなか、葛和は起き上がりいつものように支度を始めた。

寝間着代わりのジャージを脱ぎ、外着に着替えながらテレビを点ける。

テレビではちょうど朝のニュースをしており、美声で有名な女子アナの声が背中越しに聞こえてくる。

『……のよう到来年度も学園都市には数多くの子供達が入学するもようです。』

保護者の中には全寮制であることと、頻繁に内側に入り出来ないため、入学させることに抵抗がある方もおられますが、それを差し引いても、世界一の科学技術と特殊な記憶術に憧れて毎年 入学の希望者が後をたちません。

続きましては、アメリカの有名な学術雑誌『サイエンス誌』に若干
18歳で論文が掲載された牧瀬さんが日本で公演を開かれた……』

そんな内容のニュースを半分聞き流しながら、葛和は次々と支度を
整えていく。

「んじゃ、そろそろ行きますか」

時計の針がもうすぐ8時半になるうとする頃、葛和は支度を済ませ
て大学へ向かった。

講義が始まるまで後15分ほどしかないが、徒歩10分もかからな
い距離のため、特に急ぎもせずのんびりと歩いていった。

その日は今の季節にしては暖かく、空はキレイな青色だった。

~~~~~

「すうーすうー」日が頭上を通り過ぎ少し傾き始めた頃、葛和はうたた寝をしていた。

ちよつど昼休みに昼食を食べた後の授業だからなのと、葛和がいる席が窓際で暖かかったため眠気に襲われたのである。

もちろん授業中のため注意されて当然なのだが、葛和の席がちよつど教卓からは死角になっていたため教師には気付かれずに済んでいるのだった。

そのため葛和は授業が始まってからずっと安眠を続けている。

授業がそろそろ終わりに近付いた頃、教室に備え付けられたスピーカーからあるメロディーが流れてきた。

そのメロディーは緊急時に流されるモノで、これから流される放送に注意を向けさせるためのモノだった。

そしてこれから流される放送を聞こうとざわついていた教室内が少し静かになったとき、

「ギヤーーーーー！！！」

悲鳴が鳴り響いた。

その悲鳴はスピーカーから流されており、葛和のいる教室以外でも同じものが流されていた。

それはつまり放送室で何かが起こったということである。

「止める！ 離せ！ 離っアーーーーー噛むな！ …噛む…ヤ…ヤ  
メ…口……かつ…ア…」

男の声が次第に掠れていくなか、それとは別の音が聞こえるようになってきた。

グチュ、グチュ

それはまるでみずみずしい果実にかぶりついているような、

グチ、グチ

それはまるで堅い肉を噛みしめているような、

ブチッ、ブチッ

それはまるでスジを噛み千切ぎっているような、

そんな音が永遠に続くのではないかと感じるくらいの間スピーカー

から流れていた。

だがそれも長くは続かなかった。

## 現れる悪夢

不気味な放送が流されている廊下を、ある男が歩いていった。

男の名前は土佐瀉トサガタ 充ミチル。

この大学で教授を勤めており、かなりのカタブツで融通がきかないことで知られている。生徒たちにはアダ名でトラガタと言われているほど恐れられており、もし彼に校則に違反しているのを見つかれば厳しく罰せられてしまうほどである。

そして彼は今スピーカーカーから流れてきている放送も誰かのイタズラと考えていた。

「まったく悪趣味な。こんなくだらないイタズラで授業を妨害しようとするとは、どうせ先月あたりに停学にした不良あたりだろう。やはり停学では生ぬるかっただようだな。同じ奴らなら今度こそ退学にしてやる」

そして土佐瀉は1階にある放送室に向かって階段を降りていった。

放送室は土佐瀉が降りてきた階段のそばにあり、その扉は半開きになっていた。

そして土佐瀉は階段を降りきると半開きの扉を見据えながら、足音をたてないように近寄った。  
足音をたてないように歩いたのは、足音を聞いて中にいる不良が逃げないようにするためである。

そして扉の前に来ると半開きの扉の隙間に手を入れ、一気に開けて怒鳴りつけた。

「ゴラァッ。お前ら、こんな事してただで済むと思つとる……の……か……」

しかしその怒鳴り声は途中から勢いを無くしていった。

この放送室は入ってすぐ目の前に操作パネルがある。そしてガラス越しの向こう側にDJが座る防音の施された部屋があり、その部屋に入る扉が右側についている。

そして扉とは反対側に土佐瀉はあるモノを見つけて絶句していた。

それは赤い液体が広がって真っ赤になっている床と、何かに群がっている4人の男達であった。

だがこの程度なら土佐瀉は絶句したりはしない。バカが悪ふざけをしていると捉え、すぐにでも近寄り止めさせていただろう。

そんな土佐瀧を驚愕させたのは、何かに群がっている男達の姿であった。

ある男は背中にはいくつもの大きな穴が空いている。

ある男は腕から肩にかけていくつもの歯型のような傷がついている。

ある男は顔の左の側面がえぐられたように皮膚や耳が無くなっており、あご骨や筋肉が剥き出しになっている。

ある男は左足の太ももに穴が空いて、左腕が肩から無くなっている。

そして男達は皆 傷口はもちろん口や目などから血を流しながら、一心不乱に何かに噛みついていたので。

それぞれの傷はどう見ても重傷で、動き回るどころか意識を保ち続けることも困難のはず。それでも男達は悲鳴も苦痛の声もいっさい漏らさない。

土佐瀧は演技では、と思ったが一瞬でその考えを否定した。変装や特殊メイクでは傷口から今もにじみ出ている血や無くなっている左腕を再現することは出来ないからだ。

土佐瀧が今起きている異常さに気付き呆然としていると、いつの間にか噛みつくのを止めていた男達が立ち上がりこちらに振り向いた。

それらの顔はだらしく口を開けておりその眼には生気が無くうつろで、肌は血の気が無くなってわずかに青白くなっていた。そして男達が立ち上がったことで彼らが群がっていたモノが見えるようになった。

「!」

それを見た土佐瀉は悲鳴をあげそうになった。

それは所々噛みつかれ欠けてはいたが、胴体と手足があり頭と顔がある紛れもない人間だった。

「お、お前ら ひ、人をつ！」

土佐瀉は恐怖のあまり腰を抜かし座り込んでみると、男達はゆっくりと土佐瀉の方に歩いてきた。

「まさか！ お、俺を！ ヒ、ヒギャー！ー！ー！ー！」

土佐瀉は己の身の危険を感じ、床をはいながら扉に向かって移動した。

幸い男達の歩みが遅いのと、土佐瀉と男達が少し離れていたため追いつかれる前に扉に辿り着いた。

（助かる！ 後は放送室から出て扉を閉めれば！）

土佐瀧は安堵を感じながら立ち上がり扉を開けた。

しかし

「ッ！！ ギャーーーーー！！」

土佐瀧のすぐ目の前に誰かが立っていた。

それも中にいる男達と同じように体中が傷だらけで、しかもその後ろにはさらに2人も同じ様子の者が立っていて、中に入ろうとしていた。

土佐瀧は小さな悲鳴を上げながら操作パネルまで後ずさっていった。

しかし最初に中にいた男達も土佐瀧を目指して近寄ってきていた。

そこで土佐瀧はとっさに左にあった扉を開けて防音を施された部屋に入った。

そしてすぐそばにあった小さな棚を扉の前に移動させ、入ってこなように押さえつけた。

7人に増えた男達は扉にたどり着くと扉に体をぶつかけたり手で叩き始めた。

その様子はまるで扉の開け方を忘れてしまったかのようにだった。

その様子を見て土佐瀉はいけると思った。

土佐瀉はこう見えて日頃から鍛えており力には自信があった。例え相手が7人でもあんなめちゃくちゃな叩き方をしている奴らなら耐えきれると確信していた。

しかし、

「何っ！　なんだこの力は！！」

ただ扉をバンバンと叩いているだけだというのに一撃を受ける度に扉が大きく軋み、今にも破られてしまいそうになる。

男達の一撃一撃がとても重たく、絶え間なくくらい続けているため押さえている扉が少しずつ開いてきていた。

「クソツ、クソオツ、クソオオオオオオ！！」

土佐瀉は涙目になりながら必死に柵を押して扉を閉めようとした。

バンバンバン

だが無情にも扉の隙間は広がっていき、ついにその隙間から男の腕が入ってきた。

土佐瀉はとつさに手を押し返そうと片手を柵から放した。

だがそれが間違いだった。

片手を放したことで柵を支えていた力が減ってしまい、男達の叩く力が扉を押さえつけていた力を大きく上回ってしまったのだ。

そして、扉は勢いよく開けられ男達がなだれこんでいき、土佐瀉はその拍子に柵ごと弾き飛ばされてしまった。

弾き飛ばされた土佐瀉と柵に巻き込まれてそばにあった機材やイスが周囲にばらまかれ、盛大に音をたてた。

「ゴホゴホゴホッ」

土佐瀉は体を勢いよく床に叩きつけられ、咽ムセかえりながら立ち上がるうと体を起こした。

そして気付いてしまった。

男達がすぐそばにまで近付いてきているのを。

そして唯一の出入口が男達がいて通れないということ。

土佐瀉は恐怖のあまりまた腰を抜かして座り込んでしまった。

すると扉の向こうに新しい人影が現れた。

土佐瀉の位置からはよく見えないが、今はそれが誰なのかはどうでも良かった。

土佐瀉は最後の望みをかけて叫んだ。

「頼む！ お願いだ！ こいつらを何とかしてくれ。俺を助けてくれえー！！」

土佐瀉の声は放送室に響き渡った。

だが人影は何も言わない。声には反応したようだが黙ったままだ。黙ったまま、こちらに体を向けて中に入ってきた。

そして人影の姿がはっきりと見えた。

その姿を見た土佐瀉は心臓が止まりそうになった。



笑い声をあげる土佐瀧に男達がゆっくり近づき、ついにその体を掴んだ。

そしてその体に噛みつき、土佐瀧を喰い始めた。

だが、それでも土佐瀧は笑うのを止めなかった。

そして命が尽きるまで笑い続けた。

## 現れる悪夢（後書き）

始めまして。

この作品をここまで書いてみましたが、うまく書けているか心配です。

なので良ければ感想などを書いていただけると嬉しいです。

よろしく願います。

## 混沌の混乱（前書き）

今回は少しばかり長くなりましたが、

最後まで呼んでくれたらうれしいです。

それでは！



それに声だけしか情報が得られないのもパニックになる要因のひとつになるだろう。

耳で聞いただけではどんなことが起きているか正確にはわからない。それが不安につながるからだ。

同時刻に少女が廊下を歩いていた。

ぴちつとしたジーパンとワイシャツというどこか知的な感じな格好をしていたが、その顔立ちや背中の中の真ん中あたりまで伸ばした髪型からは活発な雰囲気を感じられた。だがその両方がケンカをせずに見事に調和していた。

そんな彼女は、実は最初の放送を聞いて危険を察知し行動を起こしてここまで移動してきたのである。

（スピーカーを通して放送室で起こっていることはだいたい知ることができた。あの叫び声の内容を信じるなら、いや とても信じられないけど、信じるしかないのよね。だって、あの声の出し方は演技じゃない）

そう彼女がこんな行動を取った理由もそこにあった。人の出す声というのはその時の心理状況によって声の震え方に若干だが違いが生まれる。それを聞き分けられれば相手が嘘をついているかどうかを見分けることもできる。

それを彼女はスピーカーから聞こえる少し音質が悪い声で聞き分けたのである。

「ねえ！ 撫倉さんナデクラってば！！」

「えっ？」

そこで彼女は初めて話しかけられていたことに気付いた。

撫倉が後ろを振り返るとそこには彼女とたいして歳が変わらない少女が立っていた。

平均的な撫倉よりわずかに身長が低いが、はなた少し長めの髪や目尻が吊りあがった瞳などからは活発で勝気な印象を受ける。

だが、その吊りあがった目尻は下がっており、声にも震えがあった。明らかに怯えきっている。

当り前である。たった今放送室では土佐瀉が何者かに喰われているのだ。この状況下で普通にしている撫倉の方が普通ではないのかもしれなかった。

「えっと、ごめんなさい平南さん。もう一度言ってくれないかしら」

平南と呼ばれた少女は、やっと返事をした撫倉に苛立った声で話してきた。

「だから、何で教室から出ちゃったのよ。みんなと一緒に先生が指示するまで待ってたほうが良かったんじゃないの。無闇に動き回るのも危ない気もするし…」

「そうですね…確かに平南さんの考えは一理ありますね。外を歩き回っていて土佐潟先生を襲っている何者かに遭遇してしまうかもしれないし」

「そうですね。だから今からでも遅くないし教室に帰ろうよ」

しかし、そこで撫倉は顔を横に振った。

「でも、今あそこにいることの方が危ないかもしれないのよ」

「な、なんでよー!」

「それは……」

『キヤーーーーーー!』

撫倉がしゃべろうとした瞬間教室のある方向から悲鳴が聞こえ、振動が伝わってくるほどの多くの足音が聞こえてきた。

しかし足音は撫倉たちの方には来ずに、下へ向かっているようだった。

その様子に軽く放心している平南に撫倉は話し掛けた。

「もし今も教室にいたらあのパニックに巻き込まれてケガをしてしまったり、悪ければ死んでいたかもしれない。それに、大人数が一度にパニックを起こすと誰も手がつけられないし、あれだけの人が出口に向かえば大混雑になって身動きも取れなくなってしまうかもしれないよ」

「……………うん。そうみたい、だね……………」

平南がいまだ放心しているなか撫倉が手を繋いできた。

「だから遠回りして人の少ない出口を探しましょう。それが騒ぎが小さくなるまでどこかに隠れましょう。平南さん移動しますよ。いい？」

「えっ！ あ、うん。」

そして2人は廊下を人気のない方へ歩いていった。

この時の撫倉の判断は正しかった。  
なぜなら、大群で外に出ていればすぐに土佐瀉を襲った奴らが群が  
つてくるからだ。

そして同じ頃、葛和<sup>クズウ</sup>はまだ教室の中にいた。

居眠りをしていたせいかわからないが、葛和は先程の放送でパニッ  
クにはならず、みんなが教卓に立っていた教師も含めて教室から出  
て行くのを机の下に隠れながら見ていた。

みんながいなくなった後、寝ていたせいで付いたよだれの跡を袖で  
拭いながらゆっくりと下から這い出た。

「……………取りあえず、俺も逃げた方がいいのか？」

そう言うと葛和はケータイや財布といった必要な物だけを持って教室を出て行った。

廊下はすごいありさまだった。

ケータイや音楽プレイヤーにハンカチ、帽子などがそこらじゅうに散らばっていた。

この様子から、みんながかなり焦っていたんだろって考えながら葛和スウは一番近い階段まで小走りで走っていった。

少し走っていると階段に辿り着いた。葛和は急いで駆け降りようとしたとき、階段の途中に人が倒れているのを見つけた。

葛和は慌てて駆け寄り、助け起こそうとする。

「大丈夫ですか？　もしもし？」

少しの間声をかけ続けたが、途中でこの人がもう死んでいることに気付いた。

おそらくあの大混乱の中で逃げる人達に押しつぶされてしまったのだろう。

葛和はやるせない気持ちのなかその場を離れて階段を降りていった。

葛和が最初にいたのが5階で今は3階に向かって階段を降りていたが、あれからさらに10人以上の押しつぶされて死んでしまった人達を見かけた。

もし自分もあの中にいたらと考えて身震いをしながら、葛和は3階に辿り着いた。

そこから見える廊下にもまた1人倒れているのを見つけた。

それは茶髪に少し金髪が混ざっている、少し変わった髪の色をした少女であった。

葛和はいままでと同じようにそのまま通りすぎていった。

そのとき、いままで下から聞こえていた叫び声がいっそう激しくなった。

葛和はそれを聞いて、急いで階段を駆け下りていった。

1階の踊り場にはたくさんの人であふれかえっていた。

お互いがお互いを押し合い、ある者はそばにある廊下を通って他の出口に向かい、ある者は身動きが取れず壁際で成り行きを見守っており、ほとんどの者達は目の前にあるガラス張りのドアを抜けて外へ出て行った。

しかしそれは少し前までの話だ。今は大勢の人達がクモの子のように逃げ回っていた。

そう土佐瀉を喰い殺した男たちと同じ奴らが襲い掛かって来たのだ。至るところで何人もの人が奴らに噛み付かれ、床や壁がその人達の血しぶきによって真っ赤に染まっていった。

そんな中、奴らの内の1人が階段のそばにいる女性2人に襲い掛かるうとしていた。

しかしそれを近くにいた男性が消火器を掴んで殴りつけて守っていた。

その男性はすでに噛まれてしまったのか、手首の部分に血がついたハンカチが巻かれている。

男性はさらに追い討ちをかけるように、襲ってくる死体を次々と殴っていく。

しかしいくら殴りつけても起き上がってくる。普通なら痛みに悶えるか意識が無くなっていてもおかしくないほど殴られているのに、そいつは平然と襲い掛かってくるのだ。

「クソッ、さっさとくたばれー!!」

すると男性は消火器を大きく振り上げると、そのまま勢いよく頭に目掛けて振り下ろした。

そしてバコツと大きな音を立てながら、消火器は頭にめり込んでいった。

その拍子に消火器の中身が勢いよく漏れてきていた。

襲い掛かってきた死体はそのまま動かなくなりその場に崩れ落ちた。男性がまだ漏れが収まらない消火器で体を軽く小突いてみたがピクリとも動かなかった。

それを見た男性は頷くとこの場から離れようと女性達を連れて階段までやってきた。

しかし男性が階段に辿り着くことはなかった。

男性は急に苦しみだしその場にうずくまってしまった。

「ねえ！！ 大丈夫！？」

女性達2人も心配して男性の顔を覗き込んだ。

しかし男性はさらに激しく苦しみだし、口からは大量の血を吐き出した。

そしてしばらくすると男性は動かなくなりなってしまうた。女性の1人が体を揺すって声をかけるが反応はなかった。

しばらくして彼がもう死んでしまったとわかると、女性達は泣き始めた。

するとその泣き声が聞こえたのか男性の手がわずかに動いた。

2人は顔を輝かせて男性に声をかけると、男性は立ち上がった。

そして2人の内の1人に近付いていき、その女性の喉元に噛み付いた。

「えっ」

もう1人の女性は呆然としながら、男性が連れねの女性に噛み付き喰っているのを見ていた。

そして噛み付かれていた女性が動かなくなると、男性は立ち上がり後ろにいる女性の方を振り向いた。

「ヒィッ」

腰が抜けてしまったのか女性はその場に座り込んでしまった。

男性はそんな彼女に向かってゆっくりと近付いていった。

「いや！ お願い許して！！ いやっ！」

女性はなんとか男性から逃れようと後ずさっていった。しかしすぐに壁に突き当たってしまった。

そして男性が追いつくと、ゆっくりとした動作で彼女に噛み付いた。

「痛い！！ 止めて許して！！ 痛い痛い痛いイヤやめてイヤー  
——！！」

女性は痛みで叫びながらなんとか逃れようと必死にもがいた。

しかし、男性の力が強すぎて掴まれている腕を振り解くことも出来ない。

いや、力が強すぎるといふのは正しくなかった。

男性の力は異常だった。異常なまでに強く、女性の腕の掴まれている部分が強く掴まれすぎて青く変色してしまっただった。

彼女が叫び続けていると、その声に誘われたかのようにさらに何人も群がってきた。

そんな様子を葛和は声一つ上げられず、身動きも出来ずに階段の上から見ていた。

すると噛み付かれもう虫の息になっている女性が階段の上にいる葛和の存在に気付くと、救いを求めるかのように手を伸ばしてきた。

まっすぐに向けられた目は助けると葛和に訴えかけているようだった。

「あっ」

葛和はとっさにその手を掴もうと手を伸ばそうとした。

しかし、女性の手を掴んだのは葛和ではなかった。



黄色い液体が半分まで溶けていた消化物と共に音を立てながら床に打ち付けられた。

そして黄色い液体は消化物をその場に残して、階段を伝って下へと流れていった。

しばらくの間、葛和は何度も咽<sup>ムセ</sup>せ返っていた。

すると下の方からピチャ、ピチャ、という音が聞こえてきた。

葛和は目線だけをそちらに向けた。

目に入ってきたのは足だった。どうやらピチャ、ピチャ、という音は葛和が吐いた胃液の上を歩いてくる音だったらしい。

さらに目線を上に向けるとジーパンを履いた腰が見えた。そのジーパンには血がいくつも付いていた。

最後に葛和は頭ごと持ち上げて、近付いてくる人の姿を見ようとした。

そこにいたのは白いTシャツを真っ赤に染め、肩やわき腹が噛み傷だらけの男だった。

その男は間延びしたうなり声をあげながら階段を上がってくる。

それを見た葛和は急いで立ち上がろうとしたが、足がもつれて尻餅をついてしまった。

葛和は恐怖に震えながら男が上がってくるのをただ見ることしかできなかった。

終わった…そう覚悟し葛和は目を堅くつむった。

そしてついに葛和の腕が誰かの手に掴まれた。

葛和は一瞬 身体を強ばらせたが、そこで違和感に気付いた。その手は葛和の身体を押さえつけようとはせず、むしろさっさと立てといわんばかりに上に引っ張っていた。

葛和はその手にうながされるままに立ち上がり、そのまま3階まで駆け上がっていった。

3階についた葛和は少し上がった息を整えながら、自分を助けてくれた相手の方を向いて礼を言った。

「ありがとう。おかげで助かった……た……た……」

しかし、そこにいたのは先程5階から階段を降りてきた時に見かけた、3階の廊下に倒れていた金髪が混じった茶髪という変わった髪の色の少女だった。

葛和は「ゆ、幽霊？！？」などと考えて固まっていると、急に顔を青くした葛和に気付いて心配そうに話しかけてきた。

「ね、ねえ。あなた大丈夫なの？ 顔真っ青だけど、まさか噛まれたりとかは……」

そこで葛和が勢いよく首を振ったので安心したのかため息をついてまた話しかけてきた。

「じゃあどうしたの、顔を真っ青にして？ ここに来て急になったけど……」

すると葛和は深呼吸を数回してから意を決して問いかけた。

「君、幽霊じゃないよな？」

「……………へ？」

「あ、いや、だってさっきまでその廊下で倒れてただろ？」

そこで彼女はようやく納得して頷いた。

「あれは人の大群に巻き込まれて、いつの間にか気を失っていたみたいなのよ。そのせいか体中が痛くって。一様言っておくけど、あたし、死んでないから。足もちゃんとしてるし」

彼女はそう言うと自分の太モモを叩いてみせた。

「……ああ。なんだ俺の勘違いか。あ、ちなみに俺は葛和って言うんだ。……………あー、焦った……………」

葛和は安堵の声を出しながら、ガチガチに固まっていた身体をほぐし初めた。

「えっああ、私は広瀬<sup>ヒロセ</sup> 美鈴<sup>ミスズ</sup>よろしく。……………っで、  
こんな呑気なことしてる場合じゃないのよ!!」

そこで彼女は突然大声を上げた。

「ねえ これは何がどうなってるのよ! 何で人が人に噛みついて  
るのよ!! どうして噛まれた人が今度は人に噛みついてるのよ!  
!! 何が起きたのよ、これじゃホラー映画のまんまじゃないの!  
!……!」

少女は葛和が答える間もなく一気にまくしたてた。

そんな彼女に圧倒されながらも、葛和はなんとかなだめようとする。

「まあまあ、一回落ち着いて。」

「そんな悠長なこと言ってる場合!」あなたたち! こんな所で何  
をやっているんですか!」

そのとき彼女の声を遮りながら廊下の突き当たりからメガネをかけ  
た少年が走ってきた。

外で走り回るより部屋でパソコンをイジっていきそうな感じの少年だ  
ったが、今は汗だくになりながら必死に走っていた。

少年が2人のそばまで辿り着くと、息を整える間もなく話し始めた。

「何であなたたちは逃げてないんですか？ 知らないんですか、この大学には今 生きた人間を襲ってくる死人で溢れかえっているんですよ」

それを聞いて、葛和は先程までの恐怖を思い出して少年に話しかけた。

「なあ君は今 大学で何が起きているのか知っているのか？」

「いいえ、でも奴らは危険なのは確かです。力が強すぎて、捕まれば逃げるのは無理ですよ。さあ早く1階の出口から逃げましょう！」

そう言うやいなや少年は階段を駆け降りようとした。

そこを葛和がすんでの所で少年の腕を掴んで止めた。

「何するんですか、早くここを離れないと！ 僕が来た廊下を通ってもうすぐあいつらが来てしまっんですよ！」

「でも、この下も死体が歩き回っているんだ。ここを降りるのはやめた方がいい」

「そんな…」

それを聞いた少年はその場に崩れ落ちてしまった。

「そんな…、必死にあいつらのそばを通り抜けて、死ぬ気でここまで走ってきたのに、もう逃げ道が無いなんて、もう終わりだ！どんなに逃げ回っても結局最後にはあいつらに捕まって、そして身体を喰い干切られながら死んでいくんだ……」

そして少年から泣き声が聞こえてきた。

その泣き声は小さくか細い弱々しい声だった。

その様子を見ていた葛和は彼のそばに近寄りひざまついた。

「なあ。おまえ名前は？」

葛和がいきなりそんなことを聞いてきたので、不思議そうな表情をしながら少年は「丸田です」と答えた。

「そうか。俺は葛和。なあ丸田聞いてくれ。諦めるにはまだ早いと思うんだ。確かに一番近い出口はダメになったけど、ここよりもっと離れた出口ならまだ通れるかもしれないだろ。それに”あいつらは力は強いけど動きは遅いから、もうちよとがんばればきっと大丈夫だから。だからもう少しがんばろう？」

「……はい！」

葛和の言葉に丸田は勇気付けられ泣くのをやめた。

しかし、葛和はこう言ったものの本人も確証も何もない考えだと自覚していた。

もしかしたら大学中が既に”奴ら”だらけになっているかもしれない。

もしかしたら校舎の外に出てもすぐに”奴ら”に囲まれてしまうかもしれない。

もしかしたら”奴ら”は実は1階で見たときよりも早く動けるかもしれない。

考えたらキリがないほどの不安が胸の中を駆け巡っていた。

それでも葛和は丸田を勇気付けるために、あえてネガティブなことは言わなかった。

「そうと決まればさっさと階段こゝから離れましょう。早くしないと下の”奴ら”が来るかも」

葛和はそれに頷くと丸田を立てせて、彼が来た方とは反対の廊下に向かつて走り出した。そしてその後を2人が追いかけていった。

その後、葛和たちは廊下の窓から外を眺めながら人気のない廊下を走っていた。

「今すぐ外に出るのは危険そうですね」

いくぶんか冷静さを取り戻した丸田が2人に話しかけた。

異変が起きた時間帯はちょうど1日で一番生徒が多く大学に出入りしている時間のため、外はかなりの死体たちがさまよっていた。

葛和もそれを聞き外を見て少し考え込んだ。

「そんなこと言って、だったらこれからどうするのよ!」

広瀬は少し苛立ちながら怒鳴りつけた。

「いや、それは……………」

「屋上に行ったらどうか」

丸田が広瀬の怒鳴り声に困っていると葛和が話してきた。

「屋上になら非常用のはしごもあるし、行ってみないか?」

葛和の提案に他に案も無かったので、2人はすぐに頷いた。

そして3人は人影の無い廊下を屋上に出られる階段を目指して走っていった。

## 別れ（1）

日が傾き日差しが差し込む廊下に4人の学生が立っていた。

彼らのいる廊下は静まり返り静寂に支配されていた。

「なあ、もしかして全員喰われちゃったのかな？」

葛和クズウが静寂に耐えきれずに3人に話し掛けた。

その声は強張こわばっていたせいかわいさばかしくなっちゃってしまい、静まり返っていた廊下に響いて奥まで伝わって行ってしまった。

その事に葛和がビクついていると、佐藤が声を潜めながら話してきた。

「取りあえずここから移動しよう。このままここにいても、どうにもならないからな」

「…そうだね。佐藤さんの言うとおり早く行こう」

佐藤の言葉に、今まで固まっていた残りの2人も歩き始める。

佐藤も2人に続こうとするが、ケガのせいか足元がフラついてしまっつてうまく歩けなかった。

それを見た葛和は、佐藤の傷をおっていない方の腕を掴むと自分の肩にまわし、佐藤の身体を支えながら2人の後を歩き出した。

「大丈夫か？」

「ああ、ありがとう助かるよ。それで3人はどこに向かっていたんだ？ 俺は隣の12号館から渡り廊下を通ってきたんだが、あそこの1階はあいつらで埋め尽くされてるだろうから通れないぞ」

すると先頭を歩いていた丸田マルタが前を見ながら話してきた。

「僕達はこれから屋上に向かいます。そして屋上にたてこもり、救助が来るのを待ちます。それと、もし救助が来れない、となったら屋上にある非常用のはしごを使って脱出しようと思っています」

それを聞いた佐藤は少し考え込むと、丸田を見ながら頷いた。

「うん、そうだね。校舎の中を動き回るよりはいいかもしれない。俺もその案に賛成だ」

それを聞いて広瀬ヒロセは内心ホツとしていた。

もし佐藤がここで反対していたら、最悪佐藤と葛和たちは別行動をとると言い出していたかもしれない。

そうなるかと2人と別れるのは不安だったが、彼女として佐藤をほおっておけないと考えていたからである。

4人は歩いていると、階段の踊り場にたどり着いた。

その踊り場にも他の廊下同様ハンカチやカバン、さらにクツなども落ちていた。

そして向かって右側には佐藤が通ってきた渡り廊下があり、その渡り廊下と踊り場はガラスのはめられた扉で仕切られていた。

階段のそばまでたどり着くと、丸田は駆け足気味に上がって行った。

それに続き広瀬も上がっていく。

葛和もそれに続こうと佐藤に合わせてゆっくりと歩るき出した。

そのとき、なんとなく渡り廊下の方を見ると、向かいの校舎の所に動く人影が見えた。

葛和はそれを見て声を上げそうになるのをなんとか堪え、その人影の動きを注意深く目で追った。

人影はしばらくフラフラと歩くとそのまま廊下ある方へと消えていった。

「ん？どうしたんだ」

葛和が安堵の溜め息をついていると、佐藤が怪訝そうな顔で話し掛けてきた。

「どうやら人影を見るのに集中していたため、足が止まっていたらしい。」

その事に佐藤は疑問を持ったのだろう。

「あ、ああ、いや、何でもないんだ。うん、ホント気にしないでくれ」

葛和はとっさに言い訳を言いながら佐藤に笑いかけた。

本当はさっきの人影について話しておいた方が良かったのかもしれない。

しかしそうはせずに、言い訳をして佐藤に隠した。

もしかしたら心のどこかで、さっき見たことを無かったことにしたいと、思ってしまったのかもしれない。

葛和はそんな事を考えながら、止まっていた足を動かし再び階段を

上がっていった。

階段を上がりきると、踊り場の所に広瀬がこちらを見ながら待っていた。

周りを見渡してみると、この階も下と同じでハンカチなどが散らばっていた。

違いがあるとすれば、この階には隣の校舎との渡り廊下が無いというところぐらいだろう。

視線を上に向けてみると、丸田がもう次の階段を上っていて、手すりからこちらを見下ろしていた。

「佐藤さん頑張ってください。上の階まで行けば屋上への扉はすぐです。もうひと頑張りです」

丸田が励ますと、佐藤は笑いながら頷き葛和に支えられながら上がっていく。

広瀬もその2人の後について行く。

丸田は3人が上がってくるのを確認すると、1人屋上への扉がある5階へ向かった。

「!?!? わぁー!?!?!」

葛和たちが階段を中間まで上がったところで突如として5階から悲鳴が聞こえてきた。

3人は急いで階段の折り返しをまわり、5階が見える位置まで移動する。

そこから見えたのは死体の1人に床に押さえつけられている丸田だった。

死体は二の腕に噛みつこうとしており、丸田はそれを反対の手で防いでいる。

しかしその抵抗も虚しく死体の口はどんどん丸田の腕に近付いていき、今にも噛みつきそうになっていた。

それを見た時、葛和は1階でのことを思い出していた。必死に手を伸ばしてきた、救うことができなかった、1人の女性のことを。

「うおおおおお!!」

そして気付いたときには葛和は佐藤を広瀬に預けて、階段を駆け上がっていた。

死体が丸田に噛みつこうとした瞬間、葛和は階段を駆け上がりながら拳を振りかぶり、それを死体の顔に叩き込んだ。

いくら死体の力が強いといっても横方向からの、それも階段を蹴ったときの反動も上乘せられた拳の衝撃には耐えきれない。

耐えたとしても確実に軌道はずらすことができる。

葛和の攻撃を受け、丸田に噛みつこうとしていた死体の口は斜めに移動し、丸田の顔の横の床にぶつかった。

葛和は完全に階段を駆け上がると、間髪入れずに死体の体めがけて蹴りを入れた。

するとそれは腕に命中し、丸田を押さえていた体が少し離れた。

葛和はその隙間を見逃さずすぐに体勢を立て直すと、丸田と死体の間めがけて蹴りを押し込んだ。

すると、何の抵抗も無く死体の体は浮き上がり、そばの廊下まで飛んでいきそのまま床に叩きつけられた。

「大丈夫か!？」

葛和は助け起こそうと、丸田のそばまで駆け寄った。

幸い押さえられていた手首が少し腫れている以外に、外傷は無いようだった。

「立てそうか？」

葛和の声に丸田が頷きながら、自力で立ち上がるうとするのを手伝おうと、葛和は立ち上がりながら手をさしのべようとした。

しかし、丸田がその手を掴むより先に、葛和の足首を手が掴んだ。そして葛和がその手に気付き振り向くよりも早く、その手は力任せに引つ張ると、葛和の身体を廊下の壁まで投げ飛ばした。

「葛和！」

それを見ていた佐藤はすぐに駆け出そうとするが、足下がおぼつかず、そのまま倒れ込んでしまった。

「ケホッケホッ」

葛和は壁にぶつかったせいで、うまく呼吸ができずに何度もせき込んでしまい、倒れ込んでいた場所から動けずにいた。

（クソッ、てゆうか、人を棒切れみたいに投げ飛ばすって、どんだけバカ力ちかひなんだよ）

葛和はなんとか起き上がろうとしていると、葛和を投げ飛ばした死体が立ち上がり、葛和の方へ近付いてきた。

しかし、身体に力が入らず、葛和は逃げるできない。

（ヤベエ、頭がフラフラして力が入らねえ）

葛和がなんとか逃げようともがくなか、死体は確実に近付いて来る。

そしてついに死体が目の前に来たとき、葛和は2度目となる死の覚悟をして、目をつぶって顔を伏せた。

するとすぐ近くから声が聞こえたきた。

「葛和さんから離れるー！」

「なっ！！！」

葛和がその声に驚き顔を上げると、そこには死体の首を後ろから腕をまわして締め上げている丸田がいた。

「バカやろー、なにやってんだ！ 早く離れるー！」

葛和は丸田に向かって怒鳴りつけたが、丸田はそれに首を振ると、後ろに下がりながら死体を葛和から引き離していった。

丸田自身、自分がしていることがどれだけ危険なのかは分かっていた。

しかし、それと同時に丸田は嬉しかったのだ。

奴らに噛まれたら必ず死ぬ。もし捕まれば、それは死んだのと同じだ。そうなれば見捨てるしかない。

そうするのが当たり前と、それをしてきた人を何人も見てきた。

そして自分もそうした。

葛和たちと行動していたのも、最初は生き残る確率を上げるため、いざという時は困にしようとも考えた。

それなのに、葛和は自分の危険もかえりみずに助けに来てくれた。

その事に丸田は、本当に嬉しく、そして自分がとても惨めで臆病者だと思った。

だから、自分も助けたい、他人のために勇気が振りたい、と思った。

だから、丸太は立ち向かっていったのだ。

## 別れ(2)

丸田は首を締め上げている力をさらに強めながら、死体を葛和クズワから引き剥がそうとする。

しかし、その間も死体は丸田に標的変え、襲い掛かろうと暴れていた。

そしてそのたびに丸田の腕が首からはずれてしまいそうになる。

誰が見ても力負けしているのは明らかで、振り解かれるのは時間の問題だった。

「クソツ、動けっ」

倒れたままだった葛和は丸田を助けようと、なんとか立ち上がるうとした。

しかし、うまく力が入らずに、背中から壁にもたれかかってしまった。

カシャン

すると後ろ、もたれかかった壁から、かすかに音が聞こえてきた。

それと、背中から感じる感触も今までと違って少しデコボコしていた。

振り返ってみると、そこには透明なプラスチックのような板が壁に付いており、その奥には小さなくぼみがあり、そこには消火器が置いてあった。

どうやら消火器を入れておくケースが壁に埋め込まれているようで、デコボコしていたのはプラスチックの扉だったようだ。

葛和はそれを見たとき、1階で死体を倒した男性の事を思い出した。

「そうだ、これを使えば！」

すると葛和はプラスチックに付いていた取っ手を掴むと、力任せに引っ張った。

プラスチックの扉は簡単に開いた。

力任せに引っ張ったため扉に付いていた蝶番が2つの内1つ壊れてしまったが、葛和はそれには気にもとめずに、ケースの底に固定されていた消火器を引っ張って取り出す。

そして振り返ると、丸田に襲い掛かろうとしていた死体の顔面めがけて振りかぶった。

消火器の側面は死体の顔面に見事に当たり、空いていた口から血しぶきと共に折れた歯が数本飛んで行った。

丸田は驚いたのと、死体が殴られたときの衝撃に耐えきれずに首から手を離して、叫び声を上げながら後ろの方に倒れ込んでしまっていた。

葛和は丸田と死体の間に入り込むと、死体の様子を黙ったまま見た。死体は床に仰向けに倒れており、その顔は鼻が折れているのか左に曲がっており、唇は歯にぶつかってえぐれていて折れた歯がめり込んでいた。

普通ならこれだけの傷をおっていれば大丈夫だと安心するところだが、葛和は気を抜かずいつでも振りかぶれるように身構えた。

するとすぐに死体は起き上がり、またこちらに近付いてきた。

葛和はゆっくりと消火器を振り上げると、1階で男性がしたように頭めがけて振り下ろした。

消火器はあの時より深くへこんで死体の頭にめり込み、そして死体は動きを止めるとそのまま倒れ込んでいった。

「やった、のか」

葛和は、死体が動かなくなったのを見ると緊張を解いてその場に座り込もうとした。

しかし、

「葛和！ 危ない！」

「え！？」

突然な佐藤の声に葛和が振り向くと、そこには先ほど倒したのとは別の死体が、今にも襲い掛かってこようとしていた。

しかし葛和は一瞬だけとはいえ緊張を解いてしまっていたためとっさの対処ができず、ただ迫り来る凶牙を見ている事しか出来なかった。

そしてついに死体の手が葛和の上着を掴み、そのまま自分の方へ引き寄せて首筋に噛みつきこうとした。

そう終わってしまうのだ、ここだ。

葛和一弥<sup>カズヤ</sup>の人生は、今ここで終わってしまうのだ。

19年と言う長かったような、短かったような人生は今、終わろうとしている。

小学校から仲の良かった友達と毎日のように裏山で遊んだ事とか、初めて100点取って親に誉められた事とか、駄菓子屋で爆竹買って鳴らしてたら近所のオヤジに怒鳴られた事とか、高校入学の勉強で眠かった事とか、今までであった事がどんどん頭に浮かんできた。

ああ、きつとこれが死にそうな時に見る走馬灯ってやつなんだな。

てことは俺、死ぬのか。

まあ当然か。佐藤みたいな奴ならまだしも、俺みたいな凡人がこんな訳わかんない非日常セカイに放り出されて、生きていける訳が無いよな。

ああでも、やっぱりまだ死にたくないなあ。

バイトしてコツコツ貯めた金が後少してバイクが買える額になるところだったし、女の子とデートとかもしてみたかったし、学園都市に引っ越していったあいつに超能力とか超科学とか見せてもらいたかったのに。

でも、所詮いち凡人でしかない俺じゃ目の前から逃のがれることはできないよな。

だって上着がっしりと両手で掴まれてるし、歯だつて首筋からもう数？しか距離がない。

もう避けるとか避けられないとかそんな距離じゃない。もう手遅れ

なのだ。

だからこんな状態なのにこんなに冷静でいられるのかもしいない。

そしてついに葛和の首筋を死体の歯が噛みつきそうになったとき、その間に何かが割り込んできた。

死体に上着を掴まれ床に押さえつけられているためそれが誰の物かはわからなかったが、それはよく見たら人の腕だった。

その腕はちょうど葛和の首筋と死体の口の間に差し込まれており、また死体が噛みつきこうとしている動作の途中に突然あらわれたため、それが腕だとわかった次の瞬間には死体に噛みつかれていた。

そしてそれと同時にすぐ側から悲鳴が聞こえてきた。

死体はその悲鳴に反応したのか、噛みついていて腕と掴んでいた上着を離して、体を起こしながらそちらに振り向いた。

そして死体が体をどかしたため、何が起こったのかがわかった。

あの腕は丸田の腕だった。

丸田が自分を犠牲にして助けてくれたのだ。

その丸田は少し離れたところで噛まれた腕を押さえながら床にうつすくまり、うめき声をあげていた。

その丸田に完全に立ち上がった死体が近付こうと歩き始めた。

「クソッ！」

それに葛和はとっさに腕を伸ばし、足を掴んで止めようとした。

すると、死体はあっさりと床めがけて顔から倒れてしまった。

倒れた拍子に歯が何本か折れ、鼻も右に折れ曲がり鼻血を流していたが、それでも葛和のことは気にも止めずにうめき声を上げている丸田の方には行って行こうとしていた。

葛和は急いで死体を丸田から遠ざけようと両足を掴むと引つ張れうとした、その時、死体の頭めがけて消火器が振り下ろされた。

「え？」

葛和が呆気にとられながら見上げると、そこに立っていたのは佐藤だった。

いつ拾ったのかその手には先程倒れるときに離してしまった消火器が握られていた。

「あ、佐藤助かつ…」

葛和は身体をお越しながらお礼を言おうとしたが、佐藤はすぐに消火器を抱え直すとそのまま葛和の横を通り過ぎてしまった。

「おい！ 佐とっおわ！」

葛和は佐藤を追って振り返ろうとするが、いきなり背後から脇の下を抱えられ引つ張られた。

顔をひねって後ろを見ると、それは広瀬ヒロセだった。

広瀬はこちらが振り返って見ているのに気付くと、小さな声で怒鳴ってきた。

「あんた、何のんびり床に寝ころんでんのよ！ 早く起きなさい。今がどんな状況かわかっているの！？」

「どんな状況かって……………！！！」

葛和は自力で立って改めて佐藤の方を見て、ようやくなぜこんなに広瀬が急かしていたのかがわかった。

佐藤がいたのは屋上に続く階段で、その階段の奥に扉がありそこか

ら屋上へ続く細く狭い階段がある。

そしてその狭い階段に死体は何人もひしめいていた。

そう、屋上にもすでに奴らが侵入していたのである。

佐藤は、屋上から下りてこようとしている死体を消火器でどついてこちらに来るのを防いでいた。

しかし、それも長くは続かないだろう。

屋上へ続く階段が狭いため今はまだそんなに下りてきていないが、すぐに死体の群れが押し寄せてくるだろう。

そうなれば佐藤だけでは防げなくなる。すぐにでも移動する必要があった。

「ほら！ 佐藤君ががんばってくれてるんだから、早く逃げるわよ。そうしないと佐藤君もにげられないじゃない！」

そう言うと広瀬は腕を掴んで引つ張っていこうとした。

しかし葛和はその腕を振りほどいて、倒れている丸田の方を見た。

丸田は倒れた位置からは動いておらず、腕を押さえてうずくまっていた。

「待って、あいつは噛まれたのよ！ もう助からないのよ！ ここに置いて行くしかないわ」

「……………それでも…俺は！」

「あ、ちょっと！」

葛和は広瀬の制止を振り切って、丸田のもとへと駆け出した。

「おい丸田！ おい！」

「葛和つさ…ん……………」

倒れていた丸田を助け起こしてみると、見るからに衰弱しており血の気もほとんどなくなっていた。

葛和が悔しさに顔をしかめていると、丸田は困惑の表情を浮かべた。

「な…んで、ここに？」

「そんなの助けに来たに決まってるだろ。佐藤が奴らを押さえてくれている間に、さっさと逃げるぞ」

丸田はそれを聞くと一瞬だけ驚いた顔をしたが、すぐに悲しげな表情になり顔を伏せてしまった。

「おい。どうしたんだよ」

心配そうに聞いてくる葛和に丸田は

「いいんです」

と言って顔を上げた。

その顔は先程見た時よりも血の気が引いていたが、そこには苦痛に苦しむ表情は無く、ただ小さな悲しげな笑みが浮かんでいた。

「いいんですよ、もう。見ての通りもうすぐ僕は死にます。今はこうして話せていますが、いずれ見境なく人を襲う化け物になってしまう。だからそうなる前に僕を置いて早く逃げ「うるせえ！」」

しかし、そこで葛和は声を上げて丸田の言葉を遮った。

「お前や広瀬が言ってる事が正しいってことはわかってる。お前がもうすぐ死ぬのも、それを止める術も無い<sup>すべ</sup>ってこともわかってる。でも、それでも嫌なんだよ！ お前をこんな所に置いて行くのを、お前が1人で死んでいくのを、納得出来ないんだよ！ したくないんだよ！」

そう叫ぶ声はとても辛そうで、その顔は今にも流れてしまいそうになる涙をこらえているかのように歪んでいた。

葛和は丸田の腕を掴み引き寄せ、その身体を支えながら、

「だからお前を置いて行かない！ お前を1人で死なしたりしない

「！」

葛和はそう言うと階段の方に歩き出した。

階段の所では広瀬が帰ってきた佐藤と話をしていた。

屋上へ続いている階段の方を見ると、頭が潰れた死体は何人か倒れおり、扉の前には消火器やそばに置いてあったパイプイスなどがつつかえ棒のように置かれていた。

階段に着くと佐藤が困ったような顔でこちらを見てきた。

「話は美鈴から聞いた」

「佐藤…ワガママいつてるのはわかってる。……それでも、俺は…」  
と、そこで佐藤が手を前に出して葛和の言葉を止めた。

「俺は構わない。お前が最期まで面倒を見れるならな」

「佐藤……わかった」

葛和が1度頭を下げると歩き始めた。

それを見た広瀬は納得がいかなさそうな表情をしていたが、何も言わずに階段を下りて行った。

葛和が動かずに立ったままの佐藤の横を通り過ぎようとしたとき、「葛和」と呼び止められた。

「さっき言った”最期まで”って意味、わかってるな？」

その言葉に葛和は佐藤を見ずに、「ああ」とだけ答えて広瀬の後を追って下りていった。

「最期まで、か。きつく言い過ぎたかもしれないな」

佐藤はそう言うと、自分の言った言葉に嫌悪感を感じながら、3人の追って下りていった。

”最期まで”

それはつまり丸田が死ぬのを見届けろと言っことだ。

そして死んだ後、生ける屍となったら、またはそうなる前に丸田の頭を潰さなければならなかった。

これが顔も知らない赤の他人なら、仕方がないから、生きるためにと割り切れていただろう。

しかし、それが例え会って数時間しかたっていないかたとしても、知り合いならば話は変わってくる。

知り合いや友人の身体を傷つける。そこに少なからず罪悪感を感じてしまう。

まして、知り合いを結果的に死へと追いやったのが自分なら、それはとても大きな重荷になってのしかかってくる。

しかし、それをわかっていて佐藤は丸田の死を背負わせたのだった。

### 別れ（3）

広瀬<sup>ヒロセ</sup>が待っている4階の踊り場に下りた葛和<sup>クズワ</sup>はその場で振り返り、自分達に追いつこうと下りてくる佐藤を見上げた。

今は1人で歩いているが壁に手をつけて歩いている様子から、まだ走るのは無理そうだった。

先程は死体数人を1人で倒していたが、あれは通路が狭かったため死体が一列に並んでいたようなものだから、手際よくやれば頭を潰すのはさほど難しいものではなかった。

と言ってもあれと対峙<sup>たいじ</sup>する事自体メンタルが強くなければ出来ないのだが……

とにかく、佐藤をこれ以上戦わせるわけにはいかず、しかし目的地だった屋上がダメになったためこれからどう行動すべきかと葛和は悩んでいた。

しかし、そう長く悩むことも出来なくなった。

ガゴーン

突然、上の階から大きな音が響いてきた。

「なっ何、今の音!？」

広瀬が慌ててそちらを見ると、佐藤も同じように上を見ながら苦虫を噛み潰したような顔をした。

「今のはおそらく屋上の扉のバリケードが破られた音だろう。くそっ、こんなに早く突破するなんて」

「それなら早くここを離れないと。広瀬、佐藤の事頼む」

それを聞いた葛和はすぐに動きだした。

広瀬は葛和に言われた通り佐藤に肩を貸し、葛和は先頭にたつて階段を下り始めた。

ここで重要なのは出来るだけ奴らに出会わずに逃げることだ。

今4人の内で2人しか自由に動ける者がおらず、しかもその2人もそれぞれ1人ずつ肩を貸しているため身動きがとれない。

それに佐藤の傷もちゃんと見て休ませないといけないし、丸田マルタの事もある。

なのでどこか別の休める場所を探しながら、奴らに会わないように移動しなければならなかった。

しかし、そう簡単に事が進むほど非日常セカイは優しくはなかった。

「なっ！！！」

階段を下りたその先には、死体が誰かに群がっていた。

そばにある渡り廊下の扉が開いているため、どうやらそこを通過して来たらしい。

喰われている誰かは顔を噛まれたのが大きくえぐれており、もうほとんど息がないようだった。

そしてまずいことに死体が群がっていた場所が葛和たちがいる階段の真ん前だった。これでは階段を下りることが出来ない。

すると突然 葛和が振り返ると階段を駆け上がっていった。

さらにそれとほとんど同時に、群がっていた奴らもこちらに気付いて近寄ってきた。

「美鈴。葛和の後を」

「う、うん！」

そして少し遅れて佐藤たちも4階へ引き返した。

佐藤たちが階段を上がっていくと、踊り場の所に葛和たちがこちらに背を向ける形で立っていた。

その様子はまるで階段を上りきったところで、ふと足を止めてしまったかのようなだった。

「葛和、ここにいるのは危険だ。早く廊下を通って逃げ……」

しかし佐藤は葛和のそばまで来て、同じように動きを止めてしまった。

「うそ……」

広瀬が目の中の、廊下の方を見ながら小さく泣きそうな声を上げる。

4人の目線の先にあつたモノ、それは2人の死体だった。

その死体は葛和たちから廊下へ行くルートを塞ぐかたちで立っていた。

さらに4人の後ろでは3階にいた奴らが階段の折り返しのところまで来ていた。

そしてここからは見えないが、おそらく上からも屋上にいた奴らが下りて来るだろう。

完全に退路が断られた。  
身を隠せる場所もなく、武器として使える物も見当たらなかった。

絶体絶命だ。

残された道は、このままここで死が訪れるのを待つか、玉碎覚悟で奴らに突撃するかだ。

しかし、今考えられるどんな方法をとったとしても無事にここを切り抜ける事は出来ない。

少なくとも1人はここで死ぬことになる。

( どうする、どうすればみんなで逃げ切れる？ )

それでも葛和は考えた。そんな方法なんて無いのはわかっているはずなのに、それでも考えた。

考えて、

しかし、やはり何も思い浮かばなかった。

「 僕が…行きます…す 」

そこで、今まで静かだった丸田が話し掛けてきた。

その声は弱々しく、顔色もさらに悪くなっていたが、その目はまっすぐに目の前の死体を睨みつけていた。

そんな丸田にわずかな不安を感じながら葛和は聞き返した。

「 僕が行くって、どういう意味だよ 」

すると丸田は小さくほくそ笑んだ<sup>え</sup>。

「…僕があい…つらを…どうにかしますから、…葛和さんたち…その隙に…逃げてください」

丸田の言葉が聞こえたのか横の2人が息を飲むのが聞こえた。

すると広瀬は丸田を睨みつけながら、しかしその声を弱弱しく震わせながら怒鳴りつけた。

「あんた…そんな、そんなこと…な、なに考えてるのよ！」

しかし丸田は動じずに、静かに言い返した。

「ですが…このままでは全員が…」

そこで丸田を遮って、葛和も怒鳴りつけた。

「だからって、お前を置き去りになんかできるわけないだろ！ 佐藤、お前からもなんとか言ってくれよ」

「……………」

しかし、佐藤の声は聞こえてこない。

葛和は不思議に思い佐藤の方に顔を向けると、そこには眉間にシワを寄せて辛そうな表情をした佐藤がいた。

「佐藤さんは…わかってるみたいですね」

「おい、佐藤……」

「……この状況で誰一人欠けることなく安全な場所まで行く方法は……、無い」

佐藤はそう言うつとさらに顔をしかめてうつむいてしまった。

「俺は、絶対お前を犠牲にしたり……」

「葛和さん」

すると今度は丸田が葛和を遮って、穏やかな声で話し始めた。

「葛和さん。僕は……本当に嬉しかったんです。……あなたが言ってくれた言葉で僕は……救われたんです。だから、……だからそんな……悲しそうな顔をしないでください。……あなたが罪の意識を感じる必要は……無いんですから」

「丸田！」

「僕を……助けてくれて、僕を連れてきてくれて、……ありがと……ございました」

そう言うつと丸田は葛和を突き飛ばすように離れると、そのまま正面から近付いてきていた死体に向かって突撃していった。

そして、抱きつくような形で体当たりすると、そのまま廊下の窓に押し込んだ。

そして、

パリーン

丸田の身体は2人の死体を巻き込みながら、窓ガラスを突き破って落ちていった。

「丸田!!!」

葛和はすぐに窓際まで走り寄って下を見下ろした。

そこで最初に見えたのは、真っ赤に染まった地面だった。

そして次に2人の死体。2人とも頭から落ちていったためか、頭が潰れてピクリとも動く気配がなかった。

そして、その2人の上に同じように丸田も

「うつ、くつ」

そこまで見て、葛和は口を押さえ咽せ返りそうになるのを耐えながら、その場にひざまずいてしまった。

## 死別（コウカイ）

苦しかった。

今にも涙が出てきそつだ。

誰かが自分のために命を犠牲にするのがこんなにも辛いのかと思うくらい、胸が張り裂けるくらい苦しかった。

こんな最期をさせるために、あそこから連れてきた訳じゃなかったのに。

何で、何でこんなことに……

葛和は絶望に打ちひしがれ、ただ呆然と床を見ていた。

すると、そこで急に腕を掴まれ強引に立たされた。

そしてそのまま廊下の方に引っ張られていった。

葛和が我に返って顔を上げてみると、そこには必死の形相で葛和を引きずっている佐藤がいた。

1人ではまともにも走ることできないのに、走り方もすごくぎこち

なくて今にも倒れそうなのに、掴んでいる葛和の腕は絶対に離そうとはしなかった。

後ろを振り返ってみると、広瀬ヒロセが床に散らばっている物を手当たり次第に拾っては、後を追いかけてくる数人の死体に向かって投げつけていた。

しかし、その程度で死体を倒せるわけもなく、少し足を止めさせることができるだけだった。

広瀬もそれはわかっているのか、投げつけた後は深追いはせずにくぐりに走り出していた。

視線を前に戻すと、ちょうど後ろを振り返った佐藤と目があった。

すると佐藤は目つきを鋭くしながら怒鳴ってきた。

「お前何やってるんだ！ あんな所で座り込んで、死にたいのかお前は！」

「……………」

しかし葛和は何も言わずに視線を下げ顔を伏せてしまった。

そんな葛和に苛立ったのか、佐藤はさらに顔をしかめて怒鳴った。

「何で黙ってるんだ！ 俺は本気でお前に怒ってるんだぞ、イラッ

いているんだぞ！　なのに何なんだその態度は、お前まさか本気で死にたいか思ってたんじゃないだろうな。どうなんだよ！　何か言ってみろよ！」

そこで葛和は顔を伏せたままだったが、ようやく口を開いた。

「俺のせいで丸田が……」

それを聞いた佐藤はハツとした顔をし、すぐに気まずそうな表情になった。

「それはお前1人のせいじゃないだろ。俺だって丸田を1人で先に行かせた。俺にだって責任はある。それにあの時は誰にも止めることは出来なかつ……」

しかし葛和は首を振って話を止めた。

「違う、そうじゃないんだ。確かに丸田が噛まれた時、すごく後悔した。何でこうなったって自分を責めた。でも、あの時はせめて死ぬ時はそばにいてやろうと思って、なのにあいつは、俺たちを守るために自分を犠牲にしたんだ。その事がどうしても許せなくて、そうさせた自分が情けなくて、……………だから……………」

「…だから、死のうとしたのか？」

「……………」

そこでまた黙り込んでしまった葛和に、佐藤は1度後ろの方を振り

向くと、掴んでいた葛和の腕を放すとその場に立ち止まった。

そしてぎこちない足取りで振り向くと、さっきまでとは違う穏やかな、しかし真剣な表情で葛和に話してきた。

「確かにお前の言うとおり、それはとても辛いことだと思う。葛和が、自分が原因で自分以外のヤツが傷ついたりするのが許せない夕子だってこともわかってる。でもな、だからってそれで死のうとするのは間違っていると、俺は思う」

「…なんでだ？」

それを聞いた葛和は理解できないといった様子で顔をしかめて、首を横に振った。

「なんで間違ってるって言い切れるんだ！？俺がもっと…もっとうまくやっていれば、こんなことには……」

「葛和、お前が丸田のことを死にたいと思うくらい悔やんでいるのはわかった。それでもお前は、絶対に死ぬわけにはいかないんだよ」

「？ 何言ってるんだよ」

「本当にわからないのか？ もしここでお前が死んだら、丸田は何の為に身代わりになったんだ」

「あっ」

そこでようやく佐藤が言っている意味がわかった。

丸田がなぜ身代わりになったのか、

そんな事、考えるまでもなかった。

「俺たちの為…」

「そうだ。俺たちを逃がす為に、身体をはって退路を開いてくれたんだ。すごく怖かったと思う。それでも彼は、俺たちの為に立ち向かっていったんだ。だから…」

「…だから、俺は死ぬわけにはいかない」

そこで葛和は伏せていた顔を上げた。

その顔にはまだやつれて弱弱しさが残っていたが、それでも先程までの何もかも諦めようとしていた時の表情はなかった。

「ふう、ようやくわかってくれたか」

佐藤のその言葉に、葛和はすこし困ったような顔で頷いた。

「ああ。まだ自分のことは許せないでいるけど、それでも丸田のためにも生きぬかなきゃならないってのはわかった」

「フツ、そうか」

それを聞いた佐藤は安心してなのか小さく笑い出した。それにつられて、葛和も笑い出した。

この状況になってから数時間しか経っていないはずだが、こうしてただ笑うことがとても懐かしく感じた。

まるで数年もの間、まったく笑っていなかったかのような気さえした。

2人は笑い続けた。  
辛いことや悲しいことにフタをして、思い出さないようにするかの  
ように、笑い続けた。

「ハハハ」

「アハハハ」

「こんな状況で、何笑ってるのよ!」

「「イテッ」「」

すると突然、頭を殴られた。

前を見てみると、佐藤も同じように頭をさすっていた。

2人して頭を殴られたようだ。

葛和と佐藤は声の主、もとい頭を殴ってきた張本人の方に目を向けた。

やはりと言うか、そこには広瀬がいた。

なぜか少し怒っているようだった。

「何するんだよ広瀬」

「あなたがバカ笑いしてたから止めてあげたのよ」

そう言うと、広瀬は腰に手を置いて睨んできた。

確かに広瀬1人に奴らの相手をさせ先に逃げて、しかも追い付いてみれば2人して笑いあっていたら、怒っても当然とも言える。

「ん？」

葛和はそこであることに気がついた。

広瀬は死体と戦いながら逃げている。  
そしてその広瀬は今、ここにいる。

と、言うことは……

「……！」

葛和は目の前にいる広瀬を急いで佐藤の方に押し退けると、2人を  
守るように立ちはだかった。

手元には武器になるような物はなく、まともに戦えるとは思えな  
かった。

それでも、丸田が命をかけて助けてくれたこの命を守り抜かなけれ  
ばならない。

だから絶対に3人で逃げるために力強く拳を握りしめ、前を見据え  
た。

が、

「あれ？」

しかし、そこには誰もいなかった。

倒れているのかと床を見てみたり、まだ追いついて来ていないのかと廊下の奥の方を見てみたが、やはりどこにも死体はいなかった。

「ちょっと何するのよ、危ないじゃない」

理由がわからないまま立ち尽くしていると、広瀬の不満げな声が聞こえてきた。

振り返ってみると広瀬が佐藤に抱き抱えるように支えられていた。

どうやら佐藤が支えてくれたおかげで、床に倒れずにすんだようだ。

「それよりも追いかけて来てた奴らはどこ行ったんだ？ 途中で階段もなかったし、お前が倒したってわけでもないんだろ？ いったいどうなってるんだよ？」

「落ち着け、葛和。美鈴、説明してくれるか」

今の状況に混乱している葛和を宥めながら、佐藤は広瀬を離れた。

広瀬は佐藤から離れながら抱えられたときに乱れた服を整えると、少し興奮気味に2人に話し始めた。

「それがさ私、もしかしたら見つけたかもしれないのよ！」

「？ 見つけたって、何を」

「あいつら、死体の弱点よ！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2017n/>

---

WORLD OUT

2011年11月11日04時26分発行